

関連学会印象記

第18回日本心臓ペースング・電気生理学会学術大会

上田 希彦*

第18回日本心臓ペースング・電気生理学会学術大会は佐々木進次郎会長(大阪医科大学胸部外科)の御主幹により国立京都国際会館(京都市左京区宝ヶ池)にて平成15年5月25日から5月27日の日程で開催された。5月25日には市民公開講座、植え込み型除細動器(ICD)研修セミナー、心臓ペースメーカー技士養成セミナーが催され、5月26、27日両日には「不整脈学への新しい挑戦—最前線と将来の展望—」を主題とし、一般演題(口演110題 ポスター87題)に加え、シンポジウム、海外招請講演、ケースカンファレンス等が執り行われた。また本邦での導入が見込まれる両心室ペースング療法用デバイスの施設認定を見据えた「ペースングによる心不全治療」研修セミナーも5月27日に開かれた。

本学会の柱の1つであるペースング治療については、現在、循環器領域においてトピックであるが実施される施設が限定されている心不全に対する両心室ペースング療法あるいはICDから、ほとんど全ての参加者の所属施設でも還元しうる徐脈性不整脈治療を含めたペースメーカー植え込み手技といった普遍的ともいえるテーマまで幅広く取り上げられた。特にICDについては普及が進む中で、不適切作動、現世代ICDの比較的短い電池寿命等、デバイスに依存度の高い問題が明らかとされる一方、ICD植え込み患者の自動車運転可否基準の明文化は、本学会の命題の1つである。ICD植え込み患者の自動車運転の可否については2002年5月に出された警察庁の通達では6ヶ月毎に担当医師が運転の可否を判断するとされているが、明確な運転可否判定基準は規定されていない。「ICD植え込み患者の自動車運転について」と銘

打たれたサテライトシンポジウムでは、松本直樹先生(聖マリアンナ医科大学薬理学)より1998年版日本交通事故分析センター資料から抽出した意識障害に起因する事故の状況調査について報告がなされ、新田 隆先生(日本医科大学第二外科)より国内59施設の協力により1000名を超えるICD植え込み患者の作動状況の調査報告が発表された。

ペースング治療と並ぶ不整脈に対する非薬物治療であるカテーテルアブレーションについても、発表、講演は副伝導路離断から心房細動治療に至るまで多岐に及んだ。海外招聘講演(Meet the Expert)では中川 博先生(オクラホマ大学)より、基本的な心臓電気学的手法を含めた詳細な検討により明らかにされた心外膜側の後中隔副伝導路の構成およびアブレーション方法について講義が行われた。豊富な経験のみならず、的確な視点のもと緻密な検証の積み重ねに裏付けられた内容であり、まさに'Meet the Expert'の実感であった。シンポジウムおよびランチンセミナーでは、高橋 淳先生、家坂義人先生(土浦協同病院循環器センター内科)より各々、心房細動に対する同側肺静脈同時隔離術についての発表が行われた。極めて独自性が高く、高度な技能に基づいており、海外で既に実践されている手法に倣った検討、あるいは海外の施設での研究の報告が多く見られる中、非常に感銘を受けた。また教育セッションにてバルーン型超音波アブレーションデバイスによる肺静脈隔離術について中川 博先生(オクラホマ大学)より動物実験の結果が示された。発作性、持続性心房細動に対して今後、期待される治療の1つであるとの印象を受けた。

新たな治療法の足がかりとなる不整脈の病態生理の解明も継続的な本学会の重要な主題とされ

*群馬県立心臓血管センター循環器内科

る。電気生理学的現象に関わる解剖、発生、薬理、分子生物学等、多分野にわたる研究成果について講演、発表が行われた。特に「心電現象のかたち」をタイトルとしたシンポジウムでは、須磨幸蔵先生（東京女子医科大学）、大川眞一郎先生（東京女子医科大学附属第二病院）を座長として心電現象の本質的な「かたち」を組織、細胞、分子レベルから論じるというテーマの下、5演題の発表が行われた。特別講演では遺伝性不整脈の最新の分子遺伝学的知見が堀江 稔先生（滋賀医科大学呼吸循環器内科）より、また心房細動、心房粗動の発生機序に関わる解剖学的知見について Anton E. Becker 先生（アムステルダム大学）より、それぞれ教示された。

ペースングを除く外科的な不整脈治療に関する発表も少数ながら行われた。心房細動の治療戦略、リエントリー性頻拍の治療戦略と題された2つのシンポジウムでは、Radial 手術の開発者である新田 隆先生（日本医科大学第二外科）より術中の心外膜256チャンネル3次元ダイナミックマッピングをガイドとした心房細動（約9割の症例が慢性心房細動）手術ならびにマッピング所見について発表があった。慢性心房細動では肺静脈以外の箇所からの反復性興奮あるいはリエントリーが観察されることが多く、肺静脈隔離のみの簡略化手術の適応は限られ、詳細なマッピングの必要性、有用性が示唆された。不整脈外科の第一線にある新田先生ならではの御研究であり、あらためて感銘を受けるとともに、さらなる知見への期待が高まる内容であった。

本邦での導入（保健償還）が見込まれる両心室ペースング療法用デバイスの施設認定を見据えた

「ペースングによる心不全治療」研修セミナーは、特別講演、サテライトシンポジウムを含めたプログラムで行われた。両心室ペースングの歴史、心不全の病態生理、心不全に対する従来の薬物治療、非薬物治療、慢性心不全における突然死の対策、両心室ペースメーカーの植え込み手技、設定について各専門の先生方、すでに両心室ペースング植え込みを多数経験されている先生方からの講義が行われた。心不全に対するペースング治療と題されたサテライトシンポジウムでは、慢性心不全に対する β 遮断薬、両室ペースングと左室ペースングの比較、Medtronic社製 Insync Biventricular Pacing System の概要、両心室ペースングの長期効果とその予測、QRS幅と両心室ペースングの適応、組織ドプラーおよび quantitative gated SPECT による dyssynchrony の評価について各演者から発表が行われた。

不安定な世界情勢を反映し Warren M. Jackman 先生をはじめ、一部の招聘された海外の先生方の来日が中止されたが、国内外の研究者による最新の研究結果の発表および活発な討論が行われ、教育の面でも充実した内容であり、今後ますます拡大するであろう本学会の担う役割を十分反映し、さらなる発展を予感させる本学術大会であった。ただポスター会場を含め、7会場に分かれ、実質2日間の短期間に、しかも午前中にはすべての会場で同時に一般演題の発表が行われたため、個々の参加者にとっては、充実した内容も消化不良というよりも、むしろ食べ残したような印象があったのではと思われた。今後の改善、調整を期待したい。